



勇太と光が DW に来てすぐの頃。
野生デジモンであるレアモンに襲われ、対抗できるデビドラモンのみで応戦していた。
レアモンの攻撃に動転した光は、怒声を声が裏返るほどに、喉が痛くなるほどに
上げていた。

「クソ!クソ!クソ!クソ!クソ!クソ!クソ!クソ!クソ!だから言ってるでしょ!

早く殺れ!殺れ!殺れ!殺れ!殺れ!」

デビドラモンは命令に従い、敵のデジモンに爪を立てた。

翼が裂け、焦げたデータが飛び散る。

相手のデータが霧散し、戦いは終わっていた。

だが光は、なおも息を荒げていた。

胸の奥に渦巻くのは怒りではなく、どうしようもない“恐怖”だった。

過去の自分が義父に味わされた自分の命に手を掛けられている恐怖の記憶が、喉
の奥を締め付ける。

デビドラモンがうずくまり、翼を抱えた。

光はそれを見ても、すぐには言葉をかけられなかった。

興奮状態が収まりやっと周囲の状況が理解できた。

勇太もヴォーボモンも啞然とした表情でデビドラモンではなく光を見ていた。

沈黙が長く続き、ようやく声を出す。

「…っ!

何してんのよ、早く立ちなさい!」

完全に八つ当たりであった。

ここからいつも勇太が宥める事をするのだが、その日、その時、デビドラモンの
唇が震え、か細い声が漏れた。

「…ひかりこわい。」

光の呼吸が止まった。

その一言が、まるで時間を裂いたように響く。

光は、息を吸うのを忘れた。

『怖い。』『やめて。』

その言葉は、幼い頃の自分の声と重なった。

暗い部屋。閉ざされた扉。

泣けば怒鳴られ、助けを求めれば殴られた。

“怖い”と言うたび、あの男が笑い、母親は項垂れ死人のようであった。。

それ以来、光は怖いという感情を封じ、代わりに、強いふりで生きてきた。

今、目の前の自分が化物と罵り、道具として扱っていたものが同じ言葉を吐いて
いる…自分の命令で、恐怖している。

光は何も言えなかった。

怒鳴ることも、背を向けることもできなかった。

デビドラモンの身体が小さく震え、勇太に縋りついてた。

光は手を伸ばしかけてたが、途中で止めた。

触れたら、デビドラモンが壊れてしまいそうだった。

過去の自分がそれに重なる。

それとも、自分が壊れてしまうのか。



「…怖いのか？」

やっと絞り出した声は、自分でも驚くほど小さかった。

デビドラモンは首を振った。

「ごめんなさい…ひかりにきらわれるのがいやだ。

デビドラモンこれからがんばるからゆるして…」

心臓が強く跳ねた。

光は後ずさりし、足元のデータの土を踏みしめた。

誰かを怖がらせたことなんて、何度もある。

でも、誰かに嫌われたくないと思われたのは初めてだった。

胸の奥が焼けるように痛い、それが何の痛みなのか分からない。

デジヴァイスを通じてデビドラモンの様々な意味の恐怖が、自分の心の奥に届いてしまった。

デジヴァイスはパートナーデジモンとテイマーの心を繋げる。

デビドラモンの恐怖と光の恐怖がシンクロし、初めて心が繋がった。

「…別にいいわよ。」

光は視線を逸らし呟いた。

その日の夜、光はこっそりと勇太に話しかけた。

「ねえ、日野…化も…デビドラモンの好きな食べ物って知ってる…採り行きたいんだけど。」

その言葉に一瞬勇太は驚いたが、すぐに笑顔になった。

「うん、知ってるよ。」